

[教育実践報告]

## 介護予防事業に関するボランティア活動が作業療法学学生の介護 予防に関連する病態の理解、地域リハビリテーションへの興味、 学習やボランティアへの意欲と就職希望施設に与える影響

山 本 良 平<sup>1)\*</sup>      宮 田 浩 紀<sup>2)</sup>      中 村 祐 貴<sup>3)</sup>  
池 嵯 寛 人<sup>4)</sup>      松 原 誠 仁<sup>1)</sup>      久 保 高 明<sup>1)</sup>  
爲 近 岳 夫<sup>2)</sup>      枝 尾 久 美<sup>1)</sup>      畑 添 涼<sup>4)</sup>  
平 江 満充帆<sup>4)</sup>      松 原 慶 吾<sup>4)</sup>

The impact of volunteer activities related to nursing care prevention projects on occupational therapy students' understanding of pathologies associated with nursing care prevention, their interest in community rehabilitation, their motivation to study and volunteer, and their preferences for facilities where they wish to work.

Ryohei YAMAMOTO, Hironori MIYATA, Yuki NAKAMURA, Hiroto IKEZAKI,  
Shigehito MATSUBARA, Takaaki KUBO, Takeo TAMECHIKA, Kumi EDAO,  
Ryo HATAZOE, Mamiho HIRAE, Keigo MATSUBARA

### 和文抄録

【目的】介護予防事業への参加が作業療法学学生の介護予防に対する理解、興味、意欲及び就職希望施設に与える効果を検証した。【方法】2年次の作業療法学学生のうち介護予防事業に自主的に参加した20名（参加群）と参加しなかった19名（非参加群）を対象とした。2回の介護予防事業の前後に健康などに対する理解、興味、意欲及び就職希望施設に関するアンケートを実施した。【結果】参加群は非参加群と比較して介護予防に対する理解、意欲が高かった。また、参加群は非参加群と比較して就職希望施設として医療施設を選択する傾向にあり、非参加群は1回目調査から2回目調査にかけて就職希望施設の変更が大きかった。【考察】介護予防事業への参加によって健康などに対する理解、興味、意欲は大きく変化しないが、理解や意欲が高い学生が参加する傾向にあることが明らかとなった。また、自主的に参加する学生は作業療法士として医療機関で仕事をする目標を明確に有していた。

キーワード：作業療法学学生、介護予防事業、キャリア教育

### I 緒言

我が国の総人口に占める高齢者の割合（高齢化率）は令和3年の統計で28.9%、平均寿命は男性

81.56歳、女性87.71歳と報告されている<sup>1)</sup>。一方で、制限なく生活をするのできる期間（健康寿命）は平均寿命よりも短く、高齢者が自分を健康だと感じている年齢は平均寿命を10年ほど下回ること

#### 所属

- <sup>1)</sup> 熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻  
<sup>2)</sup> 熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 生活機能療法学専攻  
<sup>3)</sup> 熊本保健科学大学 健康・スポーツ教育研究センター  
<sup>4)</sup> 熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻  
責任著者：山本良平 yamamoto.rh@kumamoto-hsu.ac.jp

が報告されている<sup>2)</sup>。つまり、不健康だと感じながら生活する期間が10年にもわたって存在することとなる。このような期間を可能な限り減らすために、健康寿命の延伸は我が国における喫緊の課題といえる。

リハビリテーション専門職（以下、リハ専門職）である理学療法士（以下、PT）、作業療法士（以下、OT）、言語聴覚士（以下、ST）は加齢に伴う様々な心身機能の低下やそれに伴う生活動作の制限といった高齢者の抱える課題やそれらの課題を抱えなくて済むようにするための取り組み（一次予防）にそれぞれの専門性から取り組んでいる。しかし、現状では介護予防や一次予防に携わるスポーツ関係施設やフィットネス施設などの健康産業に勤務するPTは日本理学療法士協会会員の1%未満とされている<sup>3)</sup>。さらに、PT養成課程の新卒者では一般病院への就職が97%と大半を占め、対照的に健康産業への就職は0%だったと報告されている<sup>4)</sup>。OTは、日本作業療法士協会の2023年の統計において、一般介護予防事業領域で勤務する会員は20名であると報告されている<sup>5)</sup>。これらのことから、健康産業分野におけるリハビリテーション専門職の人材は不足しており、リハビリテーション医療の積み上げてきた知見や技術が一次予防・介護予防の分野に十分に生かされていない可能性がある。さらに、PT、OT、STの養成課程の指定規則には一次予防に関する臨床実習が設定されておらず、介護予防・一次予防の重要性は講義の中で学ぶ以外に機会がないため、健康産業分野が就職希望施設になりにくい可能性がある。しかし、その原因は十分に検討されていない。リハ専門職を目指す学生が一次予防や介護予防にどのような認識を持っているのか、介護予防に関する臨地での経験がその認識や学生の心理的側面にどのような影響を及ぼすのかを明らかにできれば、健康産業に就職を希望する学生の増加に寄与できると考えられる。理学療法学生では、就職希望などに関する報告はあるが、作業療法学生に関する報告は確認できなかった。

本研究では、熊本保健科学大学が熊本県阿蘇市、熊本県立阿蘇中央高校と連携して取り組む介護予防事業（以下、阿蘇プロジェクト）への参加が、作業療法学生の介護予防に関わりのあるサルコペニアやフレイルなどの病態に関する理解、介護予防や健康および地域リハビリテーションへの興味、学習など

への意欲に及ぼす効果を検証することを目的とした。介護予防事業での経験が作業療法学生の介護予防に関係する病態の理解、地域リハビリテーションへの興味、学習やボランティアへの意欲に及ぼす影響が明らかになることにより、高齢化社会において活躍するリハビリテーション専門職の人材の増加に寄与できると考えられる。

## Ⅱ 方法

### 1. 対象

2023年度に熊本保健科学大学リハビリテーション学科生活機能療法学専攻の2年次に在籍しており、書面で同意が得られた39名を対象とした。このうち、阿蘇プロジェクトに参加した20名を参加群、参加しなかった19名を非参加群とした。本研究はライフサイエンス倫理審査委員会（承認番号：23007）の承認を受けて実施した。

### 2. 阿蘇プロジェクト

阿蘇プロジェクトは、熊本県阿蘇市、熊本県立阿蘇中央高校、熊本保健科学大学が連携して取り組む阿蘇市在住高齢者の介護予防事業である。この取り組みでは、高校生と大学生が主体となって、年間2回の高齢者の心身機能などの計測会と高齢者への介護予防への取り組みの支援を行った。阿蘇市では体操の動画や運動の記録をつけるカレンダーの作成などを行い、大学教員は主に計測会の技術的支援とその後の高齢者へのフィードバックを行った。阿蘇中央高校は総合的探求の時間として、大学生と合同で計測を担当した。大学からの参加者はリハビリテーション学科の教職員および2年次の理学療法学生10名、2年次の作業療法学生20名、2年次の言語聴覚学生11名であった。

まず、2023年5月に高校生と大学生で検査項目の計測手順の確認と合同練習会を開催した。この練習会の前に大学生は教員が作成した計測マニュアルに準じて各自の担当する検査項目の実施方法を練習し、測定方法を十分に理解した状態で合同練習会に参加した。その後、高齢者に対する計測会は6月に第1回、11月に第2回を阿蘇中央高校の体育館において実施した。第1回計測会の開始時には大学教員から高齢者、高校生、大学生に対して介護予防の重要性について説明を行った。説明後に表1に示す介護予

防に関連のある検査やアンケートを作業療法学専攻、理学療法学専攻、言語聴覚学専攻で分担し、大学教員監視の下で高校生と協力して計測を行った。各計測会の終了時には高齢者に対して簡易なフィードバック資料を学生から手渡し、一緒に検査結果を確認するとともに、阿蘇市が作成した体操動画を高齢者と実施した。

また、6月と11月の計測会の間に、高校生および大学生から阿蘇プロジェクトに参加した高齢者に電話にて、介護予防活動への取り組みの状況や体調などについての確認、第2回計測会への参加の促しを行った。なお、大学生、高校生ともに阿蘇プロジェクトへの参加に伴う謝礼はなかった。

(表1)

### 3. 作業療法学専攻2年次生の講義および実習

2023年度における熊本保健科学大学作業療法学専攻2年次生は、阿蘇プロジェクトと並行して学内での講義において、整形外科学や内科学などの専門基礎科目に加えて作業療法評価および作業療法治療に関する専門科目を受講している。また、阿蘇プロジェクトの第1回計測会と第2回計測会の間に学外実習として2週間の地域実習に参加した。地域実習では入院、通所、訪問等において地域生活を見据え

た作業療法や支援等について実際の現場で実習と学習を行った。

### 4. 測定方法

第1回計測会の前と第2回計測会の終了後の2回にわたり、介護予防に関係するサルコペニアやフレイルなどの病態に関する理解、健康や地域リハビリテーションに関する興味、学習やボランティアへの意欲の3つの心理的側面をアンケート形式で調査した。アンケートは表2に示す10項目で構成した。アンケート項目の①～⑨は「1. 非常に当てはまらない」から「7. 非常に当てはまる」の7段階のリッカートスケールを用いた。⑩は表2の就職希望の欄に示す選択肢の中から1つを選択させた。就職希望施設の分類は石坂ら<sup>6)</sup>の報告を採用した。なお、表2. ⑩の「その他」を選択した場合、自由記載を求めた。

(表2)

### 5. データ分析および統計学的分析

アンケート項目のうち、各対象者の①～③の合計値を介護予防に関する病態の理解の点数、④～⑦の合計値を健康に関する興味の点数、⑧～⑨の合計値を学習やボランティアへの意欲の点数として算出し

表1. 阿蘇プロジェクトの計測項目

作業療法学専攻	理学療法学専攻	言語聴覚学専攻
フレイルに関する基本チェックリスト	10m 歩行速度	簡易栄養状態評価表
Japan Science and Technology Agency Index of Competence	握力	食品摂取の多様性得点
Lubben Social Network Scale-6	2ステップテスト	TCI (Tongue coating test)
社会的フレイル	座位ステッピングテスト	咬合力検査
Mini Mental State Examination	長座体前屈	舌圧検査
お口の衰え・栄養・身体運動・社会参加に関する予防の重要度と自信度の質問紙調査	Timed Up and Go test	舌口唇運動機能検査
	開眼片脚立位時間	Apathy Scale
	骨密度検査	Self-rating Depression Scale
	骨格筋量検査	包括的環境要因調査票
	Life Space Assessment	生活習慣の調査
		会話量
		簡易嚥下状態評価表 (EAT-10)
		指こすり・指タップ音聴取検査

表2. アンケートの測定項目

理解	① 健康寿命について理解していますか。
	② フレイルについて理解していますか。
	③ サルコペニアについて理解していますか。
興味	④ 健康運動（予防）について興味がありますか。
	⑤ 地域リハビリテーションについて興味がありますか。
	⑥ 自分の健康状態について興味がありますか。
	⑦ 家族の健康状態について興味がありますか。
意欲	⑧ 学内外のボランティア活動に参加する意欲がありますか。
	⑨ 大学の授業や自己学習に意欲がありますか。
就職希望	⑩ 卒業後に就職したい施設種類について1つ選んでください。 <input type="checkbox"/> 医療機関 <input type="checkbox"/> 介護福祉施設 <input type="checkbox"/> 訪問看護・訪問リハビリテーション施設 <input type="checkbox"/> 健康産業 <input type="checkbox"/> 教育・研究 <input type="checkbox"/> 行政関係機関 <input type="checkbox"/> 大学院への進学 <input type="checkbox"/> 特になし <input type="checkbox"/> 分類が分からないため選択できない <input type="checkbox"/> その他

た。統計学的分析は、介護予防に関するサルコペニアやフレイルなどの病態に関する理解の点数、健康に関する興味の点数、学習やボランティアへの意欲の点数を目的変数、アンケート調査の時期および阿蘇プロジェクトへの参加状況を説明変数とする2元配置分散分析を行い、有意な主効果および交互作用が認められた項目はTukey法を用いた下位検定を行った。なお、全ての分析において危険率5%未満を統計学的有意とした。

また、就職希望施設に関する質問では、長井らの報告<sup>4)</sup>を参考に統計学的分析は用いず、全対象者および各群で選択された項目の割合と第1回計測会の前と第2回計測会の終了後に選択された項目が変化した対象者の割合を算出し、学生の就職希望の傾向について検討した。

### Ⅲ 結果

#### 1. サルコペニアやフレイルなどの病態に関する理解の点数（表3）

介護予防に関する病態の理解の点数を目的変数、アンケートの時期および阿蘇プロジェクトへの参加状況を説明変数とする2元配置分散分析の結果、阿蘇プロジェクトへの参加状況に有意な主効果を認め、参加群は非参加群よりも有意に高い値を示した（ $F(1, 37) = 4.668, p < 0.037, \eta_p^2 = 0.112$ ）。また、アン

ケートの時期にも有意な主効果を認め、2回目調査は1回目調査よりも有意に高い値を示した（ $F(1, 37) = 4.315, p = 0.045, \eta_p^2 = 0.104$ ）。なお、有意な交互作用は認められなかった。

#### 2. 健康に関する興味の点数（表3）

健康に関する興味の点数を目的変数、アンケートの時期および阿蘇プロジェクトへの参加状況を説明変数とする2元配置分散分析の結果、有意な主効果および交互作用は認められなかった。

#### 3. 学習やボランティアへの意欲の点数（表3）

学習やボランティアへの意欲の点数を目的変数、アンケートの時期および阿蘇プロジェクトへの参加状況を説明変数とする2元配置分散分析の結果、阿蘇プロジェクトへの参加状況に有意な主効果を認め、参加群は非参加群よりも有意に高い値を示した（ $F(1, 37) = 5.487, p < 0.025, \eta_p^2 = 0.129$ ）。なお、アンケートの時期の有意な主効果と有意な交互作用は認められなかった。

（表3）

#### 4. 各回における就職希望施設の割合

図1に全体（ $N = 39$ ）、参加群（ $N = 20$ ）、非参加群（ $N = 19$ ）における就職希望施設の割合を示す。対象者全体としては、医療機関が1回目調査、2回



表3. アンケートの点数

項目	群	第1回計測会	第2回計測会	時期の主果	参加状況の主効果	交互作用
理解 満点：21	参加 非参加	15.2 ± 3.2 13.5 ± 3.3	16.5 ± 2.4 14.6 ± 3.7	<b>0.045*</b>	<b>0.037*</b>	0.905
興味 満点：28	参加 非参加	22.6 ± 2.4 23.1 ± 5.1	23.6 ± 2.4 21.6 ± 6.3	0.788	0.502	0.166
意欲 満点：14	参加 非参加	10.9 ± 1.6 9.8 ± 2.9	11.6 ± 1.8 9.7 ± 2.8	0.522	<b>0.025*</b>	0.376

(平均 ± 標準偏差)

\*p&lt;0.05

統計学的に有意な項目を太字で示した。

目調査とともに77～79%で最も多かった。また、1回目調査から2回目調査にかけて選択肢が変更されたのは全体の30.8%であった。なお、健康産業、行政関係機関、大学院への進学は1回目調査、2回目調査ともに選択されなかった。

次に非参加群では1回目調査に医療機関を選択したのは58%であり、全体よりも低かった。また、介護福祉施設が11%、訪問看護・訪問リハビリテーション施設が5%、特になしが5%、分類が分からないため選択できないが5%、その他が11%とその他の結果はばらついていて、また、1回目調査から2回目調査にかけて選択が変更されたのは47.4%であった。

最後に参加群では1回目調査に医療機関を選択したのは95%であり、全体よりも高い割合であった。2回目調査に医療機関を選択したのは85%であり、依然として全体よりも高い値を示した。また、1回目調査から2回目調査にかけて選択が変更されたのは15%と非参加群よりも低い値であった。

#### Ⅳ 考察

本研究では、作業療法学生を対象に、臨地での介護予防事業への参加が、作業療法学生の介護予防に関係するサルコペニアやフレイルなどの病態に関する理解、学習やボランティアへの意欲といった心理的側面にどのような影響を及ぼすのかを検証した。また、作業療法学生の就職希望施設の実態および、介護予防事業への参加が健康産業分野への就職希望を増加させるのかを検討した。

まず、介護予防に関連のあるサルコペニアやフレイル、健康寿命に対する理解は阿蘇プロジェクト開

始前後ともに参加群が高かった。また、理解は両群で1回目調査から2回目調査にかけて向上していた。したがって、介護予防事業への参加の有無に関わらず、1回目調査と2回目調査の間に行われた学内での学習や2週間の地域実習などを通して介護予防事業に関わる知識の理解が深まったと言える。学習やボランティアへの意欲に関しては、阿蘇プロジェクト開始前の段階で非参加群に比べて参加群のほうが高い値を示したが、阿蘇プロジェクトへの参加の前後で変化は生じなかった。阿蘇プロジェクトは、参加学生の単位の修得に関係がなく、謝礼も提供されなかったため、ボランティア活動としての一面を有している。内閣府が実施した令和4年度の「市民の社会貢献に関する実態調査」では、ボランティア活動に参加した理由として、「社会の役に立ちたいと思ったから」が59.1%、「自己啓発や自らの成長につながる」と考えるため」が34.3%、「自分や家族が関係している活動への支援」が25.4%と報告されている<sup>7)</sup>。阿蘇プロジェクトに自主的に参加した学生は、阿蘇プロジェクト参加前から「社会の役に立ちたい」、「自らの成長につながる」という意識を持って参加していると考えられる。一方、健康運動や地域リハビリテーション、自分や家族の健康に対する興味は参加群と非参加群に差はなく、阿蘇プロジェクトの前後で変化も生じなかった。興味の合計は1回目調査において平均が28点中22.8点(81.4%)と当初より高い値を示しており、1回目調査から2回目調査にかけて上昇の余地が少なかったと考えられる。つまり作業療法学生の2年次生の多くは健康運動や地域リハビリテーション、自分や家族の健康状態などに対して高い興味を持っていると考えられる。これらのことから、健康運動や地域リハビリテ

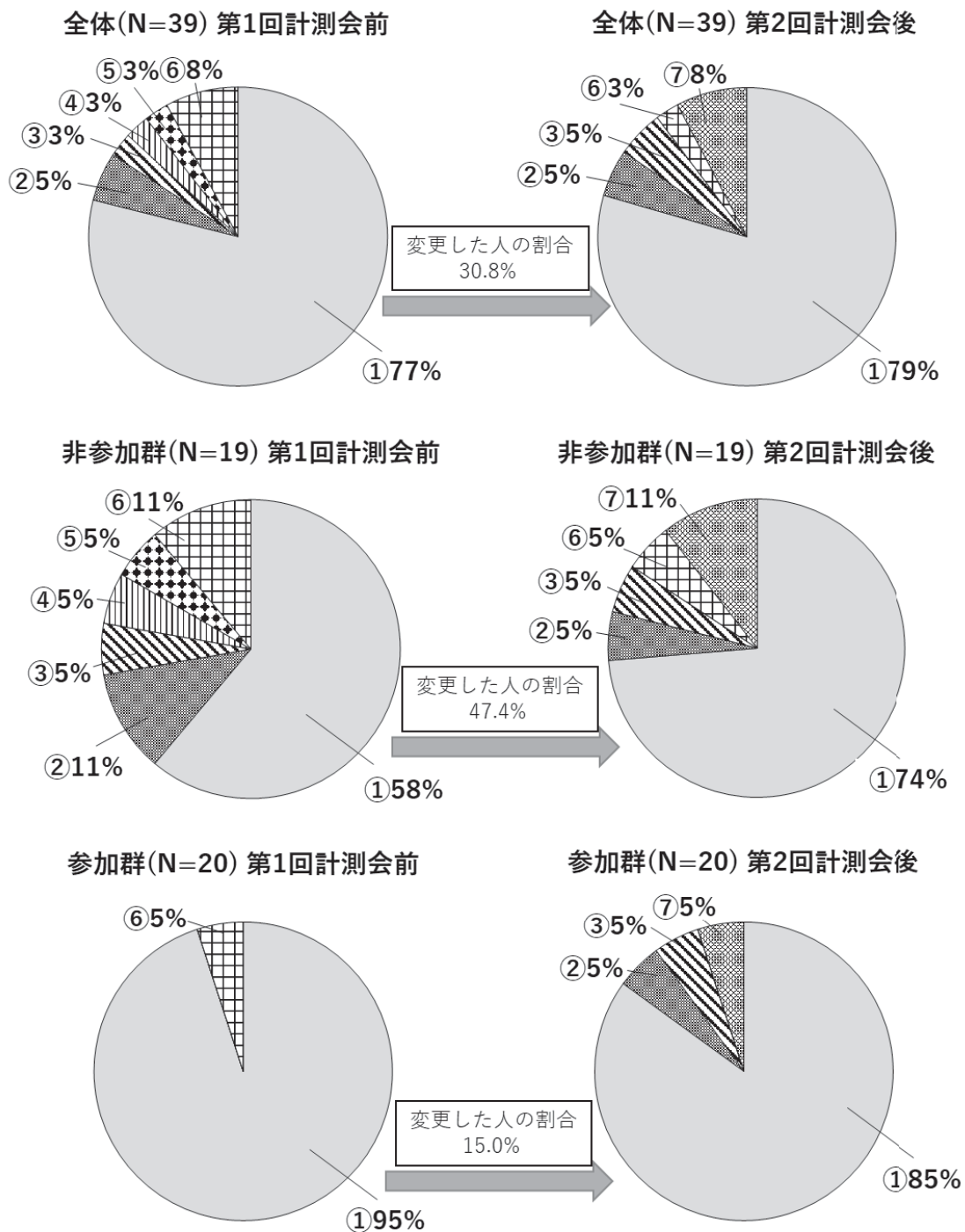


図1. 各回の就職希望施設とその割合

①医療機関，②介護福祉施設，③訪問看護・訪問リハビリテーション施設，④特になし，  
⑤分類が分からないため選択できない，⑥その他，⑦教育・研究

非参加群1回目の「⑥その他」の自由記載は「放課後等デイサービス，発達」，2回目は  
「翻訳・通訳」であった。参加群1回目の「⑥その他」の自由記載は「発達領域」であった。

ションなどへの興味の程度に関わらず、学習やボランティアへの意欲が高く、サルコペニアなどへの理解度の高い学生が介護予防事業に自主的に参加すると思われる。

最後に就職希望施設について、全体では阿蘇プロジェクトの前後ともに病院や診療所への就職を希望する学生が77～79%と約8割を占めており、全国的な作業療法士の就業状況に類似する結果となった。また、地域リハビリテーションへの興味が高かったこととも関連して、一部の学生は介護福祉施設や訪問看護・訪問リハビリテーション施設などの介護保険領域に就職を希望していたが、要介護状態となる以前の方などを対象とする健康産業分野を希望する者はいなかった。これらの全体的な傾向は2回目調査でも変化は小さく、教育・研究を選択する者が増えたが、健康産業を選択する学生はいなかった。楠奥ら<sup>8)</sup>は、インターンシップの参加がキャリア成熟を高めるかについて検証し、有意な影響は認められないと報告している。Kingは「キャリア成熟とは、知見の広がり、年齢にふさわしいキャリア決定のための個人の準備状態である」と定義している<sup>9)</sup>。本研究では、阿蘇プロジェクトへの自主的な参加が学生の就職希望施設に及ぼす効果は小さいと考えられる。ただし、参加群と非参加群の傾向の違いを観察すると参加群では1回目調査において95%の学生が医療機関を選択しており、1回目調査から2回目調査への変化が小さく、医療機関で作業療法士として勤務するという将来像を2年生の6月時点で有している学生が多かった。このことから、参加群の学生はキャリア決定をする準備状態が比較的整っていると考えられる。新人看護師対象の研究において、キャリア成熟度の高い看護師は「自分の長所・短所・特徴を理解している」、「看護職が自分に適した職業であると知覚している」、「やりがいを感じている」という特徴を持つことを明らかにしている<sup>10)</sup>。参加群の対象者はボランティアや学習に対する意欲が高いこともあり、キャリア成熟度が高まりやすい可能性がある。その結果として、2年次前期の段階で作業療法士として医療機関で働くという将来像を有していると考えられる。本研究では施設の種類のみを確認したが、3年次以降のより長期の学外実習を通して、キャリア成熟度がさらに高まることで就職を希望する施設の病期や専門分野の選択がなされると予測される。一方で、非参加群の学生では1回

目調査に就職希望施設が特でない学生や就職希望施設の分類が理解できない学生がおり、キャリア成熟度が比較的低いと考えられる。非参加群では、半数に近い学生が1回目調査から2回目調査にかけて就職希望施設を変更しており、学内での講義や実習を通してキャリア成熟度を高めている過程にあると推察される。大学の講義は作業療法士として働くという将来像の形成に寄与しているが、健康産業やその他の職業（例：研究職、機器開発など）のキャリア成熟には寄与せず、2回の介護予防事業への参加ではその傾向に影響を与えるだけの効果は得られないことが明らかとなった。

### 本研究の限界

本研究では介護予防に関する病態の理解について学生の主観で確認を行っており、実際の理解の程度を測定していない。また、キャリア成熟度を測定していなかった。今後は、実際に理解度を確認するためのテストや学生の成績などを分析に加えるとともにキャリア成熟度を測定することで、介護予防事業への参加が作業療法学生の理解などに及ぼす効果をより詳細に分析できると考えられる。

## V 結語

本研究では、介護予防事業への参加が2年次の作業療法学生の介護予防に関連する病態の理解、地域リハビリテーションへの興味、学習やボランティアへの意欲に及ぼす影響を検討した。また、作業療法学生の就職希望施設と介護予防事業参加前後でその変化を確認した。その結果、自主的に介護予防事業に参加する学生は介護予防への参加前の時点で介護予防への理解、学習やボランティアへ意欲が高く、作業療法士として医療機関で仕事をする将来像を有していることが示唆された。また、2回の介護予防事業への参加は介護予防に関する病態の理解や地域リハビリテーションへの興味、学習などの意欲に変化は与えず、就職希望施設として健康産業を選択する学生は増加しないことが明らかとなった。

## 謝辞

本研究の実施にあたりご協力いただきました作業療法学生の方々に感謝します。

### 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

### 文献

- 1) 内閣府ホームページ. 第1章高齢化の状況(第1節1)  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/sl1\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/sl1_1_1.html) (2023年2月16日検索)
- 2) 大塚忠義, 他. 健康寿命および要介護者数の将来推計. 生活経済学研究, 49: 91-111, 2019.
- 3) 野村卓生. 一次予防領域における健康管理への理学療法士の貢献. 日衛誌, 71: 107-110, 2016.
- 4) 長井真弓, 他. 理学療法士養成校の就職活動状況および就職先選択条件－東北地方の私立大学での実態－. 理学療法科学, 36 (1): 59-65, 2021.
- 5) 日本作業療法士協会誌. 138: 23-25, 2023.
- 6) 石坂正大, 久保 晃, 金子純一郎, 他. 理学療法科学部生の就職先の現状と就職先選定－3キャンパスの特徴－. 国際医療福祉大学学会誌, 22: 77-82, 2017.
- 7) 内閣府. 市民の社会貢献に関する実態調査. ボランティアへの意欲 [https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/R4\\_shimin\\_report.pdf](https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/R4_shimin_report.pdf) (2024.07.26 検索)
- 8) 楠奥繁則. 自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究. 立命館経営学, 44 (5): 169-185, 2006.
- 9) King S. Sex Differences in a Causal Model of Career Maturity. Journal of Counseling & Development, 68 (2): 208-215, 1989.
- 10) 中原博美, 亀岡智美. 新人看護師の職業的成熟度に関する研究－現状及び関係する特性に焦点を当てて－. 看護教育学研究, 9 (1): 21-34, 2010.

(令和7年1月8日受理)



The impact of volunteer activities related to nursing care prevention projects on occupational therapy students' understanding of pathologies associated with nursing care prevention, their interest in community rehabilitation, their motivation to study and volunteer, and their preferences for facilities where they wish to work.

Ryohei YAMAMOTO, Hironori MIYATA, Yuki NAKAMURA, Hiroto IKEZAKI,  
Shigehito MATSUBARA, Takaaki KUBO, Takeo TAMECHIKA, Kumi EDAO,  
Ryo HATAZOE, Mamiho HIRAE, Keigo MATSUBARA

#### Abstract

[Purpose] We examined the effect of participation in a preventive care program on occupational therapy students' understanding, interest, motivation, and desired employment facilities. [Methods] We surveyed 20 second-year occupational therapy students who voluntarily participated in a preventive care program (participation group) and 19 who did not (non-participation group). Before and after the care prevention programs, we conducted a questionnaire survey on their understanding of, interest in, and motivation for health and desired employment facilities. [Results] The participation group had a higher understanding of and motivation for nursing care prevention than the non-participation group. Additionally, the participation group was more likely preferred medical facilities as their employment facility than the non-participating group, and the non-participating group changed their preferred employment facility between the first and second programs. [Discussion] Participation in a preventive care program did not significantly change students' understanding, interest, or motivation regarding health; clearly, students with a high level of understanding and motivation tended to participate. Moreover, students who voluntarily participated definitely wanted to work as occupational therapists at a medical institution.